

- 8 「ハムレット」の最初の場合では、暗夜の亡霊を材料にしてこの文化の言説が含む不安から救済願望にいたる観念装置が展示されると共に、現実には救済を実行し得る力と信じられた王権が闇におびえる姿を示し、王権の美学を自分の姿と信じていた魂の頼りなさと、全ての虚構が幻影となったあとに残る孤独な存在の实在性を印象する。亡霊は王朝の幻影をこの世界への接点として信じ続ける魂であり、何か頼りない拵え物のイメージを介する他に心を通わせることができない人間的存在の認識的な位置とその危うさを代表する。
- 9 第一独白においてハムレットは自分の王子としてのステイタスをまったく疑わない。権力につながるものが権謀と流血の歴史につながるのだという認識が無い。だから、あらためて彼を王位継承者であると宣言する叔父の行為の政治的意味も、その宣言がなされるための駆け引きや働きかけの楽屋裏も、この過程での「王子ハムレット」の重大で危険な社会的重みも、母の気遣いもまるで判っていないのである。この生一本な性格付けは、真正直なマクベスや市井を知らないオセロの場合と同じく、美学と現実の亀裂によって感覚的に傷つくための前提である。そこに「王子」の栄光と悲慘がある。王殺しに返報する王殺しという栄光の行為を暗闇で行う必要が生じるのだ。イアゴーやアペマンタスなどの訳知りの知恵者がベティーな意趣返ししかできないのは、栄光の可能性から隔てられているからである。
- 10 観客の認識に挑戦するという意味で、シェイクスピアの芝居はどれもいたずら心に満ちていると言える。例えば、亡霊の話しを聞いたハムレットが怒りに圧倒される余り、経緯を尋ねる者達に「デンマーク広しといえども、あれほどの悪漢はいない」と言う、ホレイシオが「そんな話しをしに亡霊がわざわざ墓から出てくるのですか？」と答える。この軽妙さは、亡霊を客観化しようとするために情報の少なさに戸惑う哲学者によって意図されたものではなく、亡霊という演劇的設定の伝統的形式とその客観的意味合いにわれわれの意識を瞬間的に誘って、ハムレットが演劇の責任を意識することなく演劇空間に入り込んだことを知らせるとともに、哲学もまた必ずしも演劇的明察に至らないことを暗示している。
- 11 マクベス夫妻の物語りの本体については、拙稿「狂気の根—『マクベス』論—」(福岡女子大学文学部紀要「文芸と思想」第47号 1983年1月, pp.17-43)で分析した。その注で、特に重要と思われた幾つかのタイプの批評について意見を述べたが、王権の神聖化された合法性を道徳的評価の論理基準に取ろうとする抜き難い傾向(あるいは作者がそれを基準に取った筈だという抜き難い想定)のために、矛盾、飛躍、循環が起きていることを指摘したつもりである。

ほかならないのである。やがて、亡霊が彼に転嫁された栄光の残骸として訪れて来る。これが第四独白の「血腥く思考する」要請、すなわちハムレットを思考の可能性に絶望した知性の残骸に変えようとする作用力である。

- 4 この沈黙はハムレットに密かな命令を下す亡霊と社会全体との利害の断絶の中を流れ、亡霊の理由無く裏切られたという虚無感を流れ、栄光の過去において約束されていた天国行きの権利の幻想性として今あらためて流れ、命令されるハムレットに生じる違和感への亡霊の全くの洞察の欠如として現れる。ハムレット王が失ったのは、マクベス王が取り留めようとしたのと同じ幻想なのである。
- 5 ハムレットにおいても、宮廷人に似合いの壮麗な仮面の問題は、実はその仮面を装う必要から発しながら全く個別の根拠に基づくものと意識された復讐命令の形で現れ、現実の人間関係のなかで隠蔽しなくてはならない必要から生じる対人関係の紛糾として描かれる。独白という形式に閉ざされた独白は、第三独白において脱出の空想の彼方にも適役のイメージが与えられないという循環に陥っている。もちろん、この意識の条件では、彼の信用度を支えるのは瘴気に満ちる前の世界の壮麗さへの忠誠である。これはそれが伴う論理の混乱とは区別すべきである。
- 6 「ハムレット」における洞察を欠いた愛憎の屈折の例として、兄王に対するクロウディアスの復讐心と、弟と再婚したガートルードに対する亡霊の憤りを挙げる事ができる。冒頭場で我々は前王が王冠の権威を離ればよるべない一個の魂に過ぎないことを知るのであるが、彼と共に弟クロウディアスも王座の虚栄、すなわちよるべなさからの脱出としての栄光を信じている。壮麗に飾られた王宮において傷つくのは、隠されたよるべない孤独なのである。ハムレット王が自分を確信し過ぎたのが、弟の怒りを買った理由であり、弟が虚栄の空しさに気付かなかったのが兄を羨みすぎた理由である。全く同様に、突如暗黒に追放された亡霊は、自分の孤独をこれまでの栄光を基準にして嘆き、突如信頼する夫を亡くした妻を、彼の勢力に保護されて満足していた女として眺め続けてその変貌を解釈する。死んだ夫を思う妻の心と、新たな厳しい条件のもとで息子と生き延びる女の体の不自由とを思い併せる余裕が無いのだ。「母を苦しめよ、しかし殺すな」という手加減はかえってこの上無く残酷な結果になるが、妻に寄せる死んだ男の情愛が真の力を発揮するのは、「寝室の場」で妻が彼の姿を見ることが無いにもかかわらず、彼女の悲嘆に彼の心が自ずから応えて、復讐心を圧倒し、息子に「母を慰めよ」と依頼する時である。その場合でも事件の原因と結果についての明察が誰にあるわけでもなく、死者が見える筈がないという真実と、父と息子との言語上の一体性の演劇的可視現象との関係が誰に知られているわけでもないが、明察が無いからこそ死者が生者に託す感情の力が光るのであり、それが条件における亡霊という刺激のやむを得なさと亡霊という虚構の本来的な自己矛盾についての洞察を誘うのである。
- 7 この作者は権威の装いの下の普遍的人間を信じようとしたようである。「ハムレット」においてポローニアスが列挙する芝居の外的な目録が誘う笑いは、一人の俳優がヘキュバに同情して流す涙を理性的な疑問に付すハムレットの演劇観の内的な困難と一体である。王子が登場する涙無き権力闘争の舞台は演技する人間についての演劇的な批評の舞台として、われわれの「急所」あるいは“myraculous organ”を打つ。

比喩の価値は、溺死のイメージを借りた巧みさにある。しかし出合の儀礼の場合と同じく、これは意図されない深い洞察を含み、時空を泳ぐ人間達の脆さを定着すると同時に、地に立つ者と溺れる者との相違に訴え、大地を洪水に変える闘争を告発し、人間をそれ以上のものではないとする形而下形而上の観念群(=あざ笑う魔女)に抵抗して、兵士の息づかいに深い共感を寄せるのである。

戦争が希望の比喩であるような体系は、体系が保証する約束以上のものをそこに頑強に期待する心によって担われる。見かけは余剰そのものである希望が、生き埋めにされながら、実は生き延びる主体なのだ。魔女に「王」と呼ばれたばかりにマクベスは超自然の比喩空間に封印されていた生の希望をふと身内に漲らせてしまうのであるが、その結果、死を拒むだけでは生の名に値しないことを知ることになった。孤独のなかには永遠に來ない「明日」があるだけだった。自由は既定の権利として保証されるものではなくて、他者への応答のなかで創られ続けられるものだったのだ。マクベスが求めた未来の保証とその挫折との関係を介して、戦争の世界が生産の世界として再解釈を求められることになる<sup>1)</sup>。

(未完) (Oct. 5, 1991)

#### 注

- 1 以下シェイクスピアのテキストの引用はすべて The Riverside Shakespeare (1977) を用いた。
- 2 ここで述べているのは、意識された利害の底にあって意識されない習性の中に折り畳まれたドラマである。自己を安定させるための無自覚の操作、参照の枠組み、あるいは道徳的感受性などと呼べるだろう。「マクベス」では主人公が利己的な殺人者であるので被害者意識を介して舞台上の権威秩序とわれわれとの簡略な共感が生じ易く、「ハムレット」では主人公が復讐命令の被害者の相を示すために、我々の枠組みは不安定に漂動する。しかし、どちらの場合も、基本的には王権体制の要求を超越的に基準に取る強い安定化志向がある。なお、以下の注では、主として「ハムレット」との対応を指摘する。超越的基準としての王権を考える場合、ケネス・バークが“the mystery of the hierarchic”と呼ぶものが参考になるかも知れない。Kenneth Burke: A Rhetoric of Motives (California U. P., Berkeley: 1950; California edition 1969), p.333. バークの分析は、想像力の世界で完璧さへの欲求が“God as the beloved cynosure and sinecure, the end of all desire”に達しようとするのを疑うことはできなくても、現実の表現努力はつねに欲求と形式との衝突と妥協を疑われる必要があることを示している。
- 3 ハムレットの第一独白はデンマーク宮廷の営みに対する鋭く個人的な苦痛を披瀝し、制度の下に隠された傷を告発する。しかし、彼が攻撃に使う図式は、絶対権力者たる資質を持っていた父のイメージであって、これは周囲の人間を矮小化し侮蔑する帝王の因習的権威であり、今叔父の手にあってハムレットを苦しめているものに

である。掛け値なしの希望に促されたマクベスはこの残酷極まる驚愕を裏取引の闇に葬ろうとする。だが、これこそ希望と現実との亀裂に自らの感覚で橋をかけることを禁じられた人々が習慣的に自覚無くやっていることなのだ。魔女の好意によって美しい王宮に招き入れられたシンデレラだけが、シンデレラ物語りがそこから逃げ出して来た凄惨な悪夢を見る。

ダンカンがマクベスに感謝して「繁り」を約束し、マクベスが「繁り」に興味が無いかのように忠誠を誓った時、どちらも未来をもたらず現実の力を相手が持つと期待し、自分の権利を信じて、相手の弱さに気付いてはいないのだ。マクベスはダンカンを殺す。マクベスが戦死してもダンカンが自分の王権を信じ続けたであろうように。そうであってもダンカンが信頼する勇者の屋敷で鎧を脱いだのと同じく、マクベスは超越者によって与えられた栄光を信じながらダンカン殺しを逡巡するのである。

忠誠な兵士と同じく、ダンカンは戦争と信頼とを結び付ける不条理な制度に殉じた。マクベスもまた、闇でなされた王殺しの罪意識によって権力とは違う側面で自分の王権の欠陥を意識し、その意識によってあるべき王権への純粋な忠誠を貫く。こんな筈では無かったと惑うシンデレラのように。転嫁することのできないその惑いを生き抜くことが王マクベスの仕事である。自己への命令者となる自由を獲得した者が人間の掟と栄光を担うのだ。逃げずに、弁解せずに、転嫁せずに、自分の僅かな力への信頼を貫いて残る世界のために死ぬことができるのが「王」であるならば、死地のマクベスは「王」であったと言うべきであり、人はすべて「王」たるべく生まれている。戦場は人が自らスケープゴートとなることを選ぶことができるのを示している。しかし、人が自他の苦痛に触れることを禁じる世界、生き方と死に方が決められた世界、禁じられた苦痛が無責任な待望となる世界が人を失墜させる。そこでは特権化された栄光が鋭敏にも猜疑的となって、人間の幻想的な矮小化を招き、自己隠蔽のための特権の装いをめぐる狂奔が生じる。

自信と協力が不可能に見える世界を、兵士の言葉の最初の三行の極めつけの比喩が描く。

Doubtful it stood ;  
As two spent swimmers, that do cling together  
And choke their art. The merciless Macdonwald. . . .

(1. 2. 7-9)

と断絶を共有する共感構造に行き着く。力の大小を権利の大小として作られる序列構造においては、その日を生き延びて明日をもたらすための努力が明日をどのように生きるかの問題をかき消している。その重大なかき消しを無視して集団の今日の生存を現在の生存構造のままで守らなくてはならないという衝迫が、至上命令として合法化され、勇気のそのような使われ方を美德に見せているのである。

このようなわけで、苦痛を知っている共感的存在における、教条となり習性となった責任転嫁の構えと、自由な企図によって新たな時間を生む知性との関係が、あらためて問題になっている。

二つの「女神」のイメージを通して、傷つきやすい男女同士にとっての互いの存在の意味が浮かび上がる。しかし聞こえて来るのは、物事のままたらなさに対する幻想的特権者の声高い非難と、物事を思い通りに動かす機械に変身する幻想的意志の賞賛である。死の不安を逃れるために不安の源泉である肉体の声が封じられて、時間の創造の源泉である身体が無視される。男性に強いられた勇者的跳躍の世界に出場できるのは、凱旋する勇士に褒美として与えられた美女の伝統という刹那的な無時間を飛翔する女神である。

しかし、戦争の不安を示す「売女」の比喩は、蔑まれた家庭空間の生産性を逆照明する。生活の綻びを繕って明日を用意できるのは、憎悪ではなく愛であり、権威ではなく肉体なのだ。直ちに復讐心になるような孤独の苛立ちは、肉体の自己憐憫の表情であり、それは協力の相手を私有化する幻想を生むのである。傷口は癒されないままで、責任が転嫁され、苦痛が循環する。「帝王」という尊大な見かけも弱さを隠す不毛な装飾なのだ。

勇敢さが愚行であるという許し難く矛盾する両極から始まった我々の探索は、その隠れた中央部に辿り着いて、死の宿命を抱えて生きる人間、溺れる同士のように争いという姿で互いにすがりあっている群像に出会う。これは単に迷妄であるのではない。唯一の希望の回路なのである。だから、迷妄を指摘する理由があるのだ。

超自然に転嫁された希望が同じく超自然に投影された威光の姿を取った時にマクベスは、王になることは王を殺すことであり、王を殺すことは人を殺すことであるという無惨な真実に直面する。それまでは、王を殺すことは権利の問題に、人を殺すことは勇気の問題に変形されていた。マクベスはその全領域を転嫁なしに一人で体験する。人殺しへの嫌悪を「王」のための「勇気」によって超越するよう勇士に教えた王国文化の内部矛盾を彼は人格の分裂として経験するの

格のある不動の存在ではなくて、勝って帰って始めて女性と生きることの慰めを手にする弱い存在である。このごく基本的な真実から生活を設計することを人々は許されていないのである。

死すべき者の弱さを互いにいたわる他に上手く生きることとはできないという認識が禁じられているのだ。

## 9 スケープゴート

では、一つ実験してみよう。戦国の武将の妻である女性が、自分が信じてきた夫婦生活には実は何の将来の保証も無く、自分達は本来可能な筈の安定を奪われているとある時急に明瞭に意識し出したらどうなるだろう？ しかも、この社会が与える最高の幸福の権利を自覚させられてのこととしたら？ その狂おしく自覚された欠失感がこの世界の裏を支配する形而上学通りに運命の責任に転嫁された形で訪れ、それを掴むには勇気という献身の美德が必要なのだとこの世界の表の規則が告げたとしたら？ 夫への期待を支えるために自分が一度だけただの女であることから跳躍しなくてはならないと決めたこの女性に石を投げることでできる者がいるだろうか？

マクベス夫人の行動は戦国社会の習性となった生存形式を結局そのまま映している。彼女が悪口を言われるのは、全てを知ってその知識に健気に耐えて跳躍しようとしたからである。彼女の人間としての挫折は、彼女が宮廷の意志決定から疎外された家庭内存在であること、および、宮廷の意志の中心イメージである「王権」が同胞愛から遠いこと、の複合した結果である。

マクベス夫人は、この社会の人々が互いに転嫁し合って構成している欲望充足の基本パターンを一度だけ孤独に女を捨てるという形で一人の責任で演じて自由な世界に飛躍しようとする。そして、それが人間性の抹殺であることを体験し、人間性が抹殺され得ないことを示しながら、無惨な疎外による失意によって内側から死ぬ。それは、苦痛を循環させる転嫁の制度が単なる安楽の追求ではなく疎外状態からの飛躍の試みであることを証明する。空虚を戦いで埋める義務を負わなかったので、彼女は戦いの裏にある空虚そのものを心に迎え入れる役に当たることになった。マクベス夫妻は、心と教養との齟齬の物語りの自己撞着と困惑をそれぞれの立場で変奏し、その自己撞着に気付かない社会の苦悩を負ってけがれの淵へと追放される。

夫妻の亀裂を追っていくと、戦争による生活設計がもたらす共感の断絶構造

さて、兵士によって爆発寸前の大砲に変えられた勇士はロスによって再び戦う人間同士に返って、“self-comparisons”という「対等条件で」しのぎを削っているように見える。だが、敵と味方の同一性、同等性、等質性、が強調されているのではない。味方の損害を表す“dismal conflict”と敵の侵犯性を表す“disloyal traitor”とは敵の意識から勝手に抽象されたまま結びついて、こちらの不安の投影である怪物めいた侵犯力として出現する。この強大な悪の印象に対して味方の勇士が“self-comparisons”という誇らしい位置を主張して人間的な抵抗の趣を見せる。このような不等性、差別がロスの比喩構造の要をなしており、味方の勇士に「安全に鎧い包まれる」資格を与える。

「戦いの女神」は「幸運の女神」と違って勝敗の不確かさを責められることなく、「勇気」の美德を代表しかつ賛美するように見える。まるで、勝敗は念頭に無いかのようだ。しかし真相は二重三重に明らかになる。第一に、ロスは始めから「勝利」を伝えに来ている。マクベスへの魔女の予言のように、知識の時間差が「勇気」の約束を純粹に肉体化する。マクベスが殺されていたならば、「ペローナ」は「運命」に変形していただろう。第二に、勝ったと聞いてダンカンが喜びの声を挙げる。これは助けを呼ぶ兵士の声と同じく、生死の区別を超越している筈の勇気の文脈には属さない。「幸運な！」というダンカンの叫びは、勇気の不確かさと、生きる願望の確かさを証明する。この認識は公に確認されることなく私的に隠され、たまたま勝ちが訪れた時に安全に外に出て来る。すなわち、勇者ロスの比喩体系の中に全く見つかる心配なく「安全に鎧い包まれて」いるのは、勇者の安全ではなく、勇気への確信でもなくて、孤絶した生存願望なのだ。その隠され孤立した願望こそ、この比喩体系に拠って生きる人々が異常に鋭い猜疑心をもって他者の中に見出して攻撃する「裏切り」なのである。

第三に「花婿」のイメージは男女の交わりの幸福を勇気の褒美として表現している。女性がない戦場を描写するのに男性だけの場で使われる女性イメージは、勇気の実際の中では問題にならない筈のエロスの欲求の広がりや制度的に勇気の意味付けに組み込まれているのを物語っている。まるで、勇気さえあれば幸福な恋愛や結婚が約束されているかのようであり、それは人生の展望の中では勇気が実はステップに過ぎないことを示してもいる。だがこの約束は、未来の生存を期待する権利を断念した上で、たまたま他者の死に恵まれるという運命の好意を自分の力のように誇るという飛躍の言い換えなのである。

女は実際には勇士の回りを飛び回る女神どころか、男に生きて帰って貰わなくては生活の設計ができない弱い存在である。男もまた女の変節を非難する資

体的存在が自分の眼から自分の弱さを隠そうとする現象に他ならない。その時に、希望の唯一の源泉であるべき身体が、恥多い肉体と超越的な特権意識に分裂し、分裂の苦痛が他者に転嫁される。

「売女」を非難する男は当然＜下賤＞と罵られる苦痛を自ら知っている。高貴を剥がれることを心配しながら、そのような心配から無縁であるような顔をしている。＜下賤＞を攻撃して＜下賤＞を逃れようとするパターンは、切られる苦痛を知って苦痛を逃れるために剣を使いながら苦痛からの超越を演じる戦士の生き方の背徳と欺瞞を明確にする。勝者のステイタス意識は下層者への高貴な共感の自由を高貴の名によって抑圧するが、名誉心は同胞の苦痛を慮ばかりの勇気を持たないことを勇気と言いくるめる。自分の苦痛への配慮の精神主義的な禁止は、他者の苦痛への配慮の社会制度上の欠如の結果である。

弱い身体を生き延びたいばかりに哀れな競争に狂奔する者がその姿を恥じて自分を飾る幻影がステイタス(=威光)であり、その恥を他者に転嫁する言葉が「下賤」である。またその転嫁を合法化する意志が「名誉」であり、合法化の恥を他者に転嫁する言葉が「非道」である。従って、死者は彼らを殺した者のために「名誉」の恥を地下に埋めて生きる道を開けてくれたことになる。

では一度、「売女」と呼ばれる前の「女神」の日常に触れて見よう。「貴」の装いが故意に引きむしられる前の姿に会ってその条件を眺めて見よう。

## 8 戦いの女神

兵士が退き、貴族ロスが入場する。彼の10行ばかりのなかに現れる女性イメージがローマ神話の「戦の女神」ベローナである。勇気ゆえに男を「花婿」に選んだ誇り高い貴夫人の装いをしている。

Norway himself, with terrible numbers,  
Assisted by that most disloyal traitor,  
The Thane of Cawdor, began a dismal conflict,  
Till that Bellona's bridegroom, lapp'd in proof,  
Confronted him with self-comparisons,  
Point against point, rebellious, arm 'gainst arm,  
Curbing his lavish spirit.

(1. 2. 50-57)



可能な負担は結局個々の肉体に還って来る。「売女」という不当な比喩を投げつけられた哀れな「女神」は、体を強者のイメージに捧げている人々の自己認知能力の疎外された姿なのだ。

## 7 売 女

「売女」は裏切りの比喩である。＜女神という売女＞が成り立つのは、「女神」は幻であっても「売女」には体重があるからである。つまり、この不当な使いかたは、この罵倒の対象である女性の社会条件を映し、そのように罵倒する男性の社会条件を映す。この言葉が女神に適用されるのは、売春婦に対するこの差別語が上品な階層の女性に対して強烈な凶器として使われるからである。性の不倫関係は勝利の約束の嘘を強調するだけの全くの言葉の遊びであるために、この侮蔑用語の性質をよく示す。攻撃されているのは、売春でも不貞でもなくて、女の身体的存在が男からの特権的な帰属の要求に耐えないという現実なのだ。その時怒りの対象として、女の動機とは無関係に、彼女の性的機能が選ばれ露出されるのである。すなわち、女性の性的機能は男性権威への帰属から生じるステイタスによって飾られ隠されているべきものとされているのである。隠されているのは、実は恥と定義された男性の性的欲求なのだ。

兵士による「売女」の使い方は、外部の権威の比喩であることを求められているのが女性だけではないのを示す。男性も同じく身体的存在として動きながら、「名誉」の一片であることを要求されている。この兵士が失神寸前に助けを求める時、肉体を持つゆえに出血の負担に耐えない存在が弱気、臆病という恥辱語に囲まれているのが示される。傷つき易く痛みを感じる体であることが罪悪なのだ。「女神」において、男はこの不合理な苦痛を女への要求に転嫁するが、「売女」はこの転嫁の挫折を記録する。

女の肉体を非難することによって男が自分の肉体を自己矛盾的に装うのは、彼の肉体の権威が自己矛盾的に侵害されているからである。「女神」の裏切りは勝利が希望通りに来ないという事態であり、「敵」が敗北の義務を履行しないというに等しい。戦う者は自分の権利意識を支持する責任を相手に負わせて、相手の肉体を攻撃する。勇者の比喩によって武装されているのは、身体的存在である人間が持って生まれた不確かさ、弱さなのである。兵士は敵に投影された自分の矛盾によって攻撃されている。自分の軍事力が信頼に耐えないことを逆恨みし、勝利の約束が虚偽であることを隠蔽し続ける現象は、存在の不安に耐えない肉

Nothing afeard of what theyself didst make,  
Strange images of death.

(1. 3. 96-97)

戦争という死の創造の壮絶な事実のレポートが「名誉の香り」に匂うのは、活動する人の姿に焦点が絞られて、生の祝祭の風を帯びるからだ。だが、それにも比喩の機微はついて回る。暫時、勇士は不死性を受け、肉体の弱さに拘泥しない超越体となっている。人間にとって道具が道具として安全に役に立つ限度を示す“charge”と“crack”の知恵は、一挙に“double cracks”と対比されて、弱さの印として逆用される。「大砲」と「火薬」からは苦痛感が消去され、過剰な爆薬の装填量からは爆発への時間が消去されて、自爆の矛盾が隠れる。思考が停止する。戦いは戦士にとっても見る者にとっても未来を見通した行動ではありえない、何が目的か「判らない」のだ。「血を浴びる」意志も「第二のゴルゴタを印する」努力も、比喩はすでに比喩のための比喩に過ぎない。理性からの超脱の要求は言葉の思想性と衝突せざるを得ないのである。それを合図に、すでに述べたように死に瀕した兵士の肉体が比喩の崩壊を告げる。

だが、“overcharge”と“double cracks”は、正気から思考停止への飛躍を正確に記録している。人間を武器以上の武器に変形する操作の基本には、殺人機械は人間ではないという不変の認識がある。「大砲」と「火薬」が二倍量で比喩となることで示されるのは、このような殺人の道具を用いる必要に対する正常な感性の無力さなのだ。また、“strange images of death”はどこまでも“strange”であり続ける。戦場で恐れることなく“strange”なものを作る戦士は、日常ではそれを恐れ自他の弱さに配慮する人間であることを当然求められるだろう。しかし、勇者像は人間の弱さへの共感の停止を美しく装う。無効かつ異常であるのはこの停止の要求なのである。無効さが頑強に無視される限り、“strange”は異常さの感覚ゆえに賞賛される。

我々は先ほどの問に答えることになる。これほど明白な倒錯に基づくこの大がかりな比喩の催しの陰の企画者は誰なのか？「勝利」「正義」「勇気」など戦う者のしがたい利益の主張によって凶暴に装われているのは、己の弱さに耐えない心なのである。不死性を受けた勇者像にとって、人の生身は超越すべき生まれつきの傷なのだ。弱さを弱さとして直視できない弱さが、強がりの虚栄によって勝利の幻想という負いきれない負担を新たに作る。「勝利」の神話は弱さを他者に転嫁するが、幻想を裏打ちするための「希望の女神」の幻想に負わされた不

この間の言葉の挙動を、「幸運」と「戦い」の女神の姿で二回出てくる女性イメージについて観察してみよう。

The merciless Macdonwald

(Worthy to be a rebel, for to that  
The multiplying villanies of nature  
Do swarm upon him) from the Western Isles  
Of kerns and galowglasses is supplied ;  
And Fortune, on his damned quarrel smiling,  
Show'd like a rebel's whore : but all was too weak.

(1. 2. 9-15)

予見できない生死の不安が「運命」に転嫁され、運命の優しさへの待望が女性イメージに転嫁された。だが「女神」は、あろうことかたちまち「売女」と罵られる。兵士の疑惑を証人として偽りの高御座から追われたのだ。これは彼女には承服できないことだろう。もともとできないことを負わされたただけなのだから。非は戦う前に勝つことを期待した方にある。しかし、この扱いに黙って耐えて不確かな希望を不確かなままで残すことが、彼女の優しさなのだ。最初から「運命」は破綻の受け皿なのである。「女神」が「売女」の罵りを受けとめる限り、兵士の脱出願望は罵る者の有利な位置感覚に変換され、彼の「正義」は「敵」に敗北の義務を指定し続ける。この強引な転嫁と循環の言語操作のどこにも出口は予定されていない。

最初から思考は停止しているのだ。その意味では戦争は勝ちさえすればいいという意志の露出である。それにしてはこの循環する転嫁の装置はえらく七面倒で空虚な装飾に見えないだろうか？ 何故この神話は自己撞着を犯して、勝ちたいから戦っているという事実を隠蔽し、勝てばいい、自分だけは生きていたい、という欲望を隠蔽するのだろうか？ 何故勝利が特別な権利であるところまでして装うのだろうか？ これは力の信仰とは次元が違う問題である。「正義」と「勝利」と「幸運」の三位一体の観念群は、力の信仰を隠す何か隠れた必要を転嫁されて、その負担に喘いでいる。

その秘密は、勇士の伝統の極限を示すマクベス像に表れている。

cannons overcharg'd with double cracks

変わらず敵と味方の利害に即して損耗として計上されるのである。

魔女は上演予定の舞台の楽しみ所、眼の付けどころまで親切に予告して退く。「霧」と「瘴気」に包まれて美醜見分けが付きませんよと。勝った者負けた者がそれぞれの道を辿って戦いの舞台から降りたその時が、霧に閉ざされた倒錯の世界が見える時だと。政治向きの風刺を嫌った王国の政府のように、弱みが疑惑を生む。今は、勝った者負けた者の数に死者を入れないわれわれの習慣への底知れない疑惑に絞ることにしよう。殺された仲間をめぐる我々の権利意識は、果たして死者への正当な態度なのか？ 彼らの苦痛を忘れ、我々の苦痛を覆う足しにしているだけではないか？ 思い出のなかにある死ぬべきでなかった人を殺さずに済んだ可能性を探るといふ一番大切な配慮を拒んで、経験からの学習をおろそかにしているのではないか？ 互いに権利を叫び合い苦痛の責任を帰し合う戦争というものは、特権を信じるための果てしない忘却を互いに転嫁し合うことではないか？ われわれ自身を予定された死者として承認し、かつそのことを忘却することによって生き延びる空しい跳躍を信じているのではないか？

## 6 幸運の女神

反逆と敗北の因果物語りは純粹に強者の野心と挫折を中心に構成してもよかった筈である。マクベスの「野心」にこだわる人はそのように読んでいる。しかし結果的には相似でも、「マクベス」は強力な女性主題に浸潤されている。すなわち、男性の領域と信じられた「権力」と「勇気」の舞台に対して、女性はや無用な口出しをする愚かな他者ではなく、女性の口出しを無用とする伝統を侵して口出しする連帯した主人公なのである。これは性差領域の侵略関係の逆転、宮廷から家庭への視点の移動を意味するが、これまで述べて来たように「名譽」と呼ばれる勇者の連帯形式がさらに根底的な同胞意識によって血腥い自己撞着の転嫁行為と見え始めるのと軌を一にしている。さて魔女とマクベスの出合に先んじて宮廷の言葉の儀式が進行し、約60行、行方分からぬ戦いの様子が描写され、双方の勇士達の生と死が整然と敵味方美醜塗り分けて語られ、所期のただ一つの目的に達して突然終わる。

Ross.                      and to conclude,  
The victory fell on us.

Duncan.                    Great happiness !

む人間がお互いに争って有利な条件を得ようとしているという暗示が得られるが、その視点を明らかにするかのように、狭義の戦争行為自体には「ゴタゴタ」という侮蔑的な一言が与えられ、戦いが終わった時が特に選ばれる。戦争のいちばん熱烈な側面、英雄物語りの尽きない興趣の部分、勝つか負けるかの切迫感は、魔女の興味の外なのだ。

それにしても“when the battle is lost and won”という言い方にはひどい違和感がある。鼻白むほど客観的なのだ。なるほどとは思うのだが、戦わねばならない人間の誰が、勝者か敗者かの立場に身を置かないでいられるだろうか？ 勝利感や敗北感、支配の希望や再起の希望に身を揺すられないでいられるだろうか？ すると、ここに魔女の特性の一つが明らかにされたことになる。たとえ人の頭が客観的な展望を承認するとしても、戦う彼の感情は他人のようにそっぽを向いている。これは我々自身の自己中心的な主張と客観化の欲求との亀裂である。自分の戦争意志を合法と信じるわれわれだが、闘争に遠くから侮蔑の表情を向けることを知ってもいるのだ。結果的に、戦争は起き続け、勝つ者と負ける者が現れ続け、嵐を避ける家は見つからないだろう。違和感は、私がこのことを余り意識させられたくないのを示している。

しかし、毒は垂らされた。「勝って負ける」と指摘されただけで我々は封じておいた気がかりを触発されてしまう。勝って負けては戦う意味が無い。意味を失えば壮大な損耗の愚行しか残らない。勝ちたいから美しく見える戦争だが、合算すれば死んだ人間の分だけまるまるの損なのだ。そこで気づくことがある。戦争は誰かが勝つから終わるのではない。損耗の耐え難さに気づいた者が、敗北を宣言するから終わるのである。勝ちをめぐる戦いの言論では、このことはほとんど話題にならないけれども。

Sweno, the Norways' king, craves composition ;  
Nor would we deign him burial of his men  
Till he disbursed at Saint Colme's inch  
Ten thousand dollars to our general use.

(1. 2. 59-62)

敗者は埋葬という形で損耗を処理して生き延びる。勝者は賠償要求という形で損耗の償いを求めて生き延びる。入り乱れる死者達にはもはや敵と味方の区別はなく、生き残った者の記憶する姿に照らせばただ無惨な毀損なのであるが、相

なる「王権」として疑わないものの血腥い実態を暴くのに、「運命」に転嫁されていた希望のなかでも信じ難いほどに栄光に満ちたものによって呼びかけるといふ策略を取るのである。その皮肉な結果として、王冠を奪い合う闘争の舞台で無条件に保たれている王権の栄光が傷つくのだ。「威光」が、血腥い勝利から流血の暴力を忘却した虚構であることがマクベスの内部で無自覚のうちに露呈するのである。猜疑に陥り凶暴になり人心を失って侵入軍の手に落ちたマクベスを「野心家」とか「屠殺者」とかと呼ぶとき、マクダフ達は王権制度の公式の比喩で満足し、思考を停止している。マクベスの独白に付き合った我々には王国の自己防衛の言説が自己を傷害し続ける短絡であるのが判る。魔女は、その洞察の触媒として投じられたいたずら者である<sup>10)</sup>。

「魔女」は理性の外側の世界に属すると同時に、理性の威信を傷つける侵入者であるが、この作品での魔女の扱い方には迷信の疑いは無い。生きる不安と苦勞が生んだ恨みつらみが抑圧され地の果てに追われたいじましい姿は、王冠の威光とは対蹠的であるが、それが王国の公式の言辞の裏側から栄光の舞台に作用して、その隠された姿、社会的に処理されないままで力で封印され生き埋めにされた欲求の満たされない姿を明らかにする。王国の規律と「超自然」との迷信的ななれ合いが暴露されるのである。その触媒機能は魔女のコーラスという奇抜な趣向によって先ず宣言される。

*First Witch.* When shall we three meet again ?  
In thunder, lighting, or in rain ?

*Second Witch.* When the hurly-burly's done,  
When the battle's lost and won.

*All.* Fair is foul, and foul is fair,  
Hover through the fog and filthy air.

(1. 1. 1-4, 11-12)

「雷鳴、稲妻、雨」は家の外の（文化の馴致の及ばない）現象である。人間に頭を抱えて右往左往させる自然エネルギーに満ちた隠れ場の無い原野が魔女の好みの場所らしい。雷雨のイメージは戦争のそれに移行する。どうやら魔女の今日のお遊びの主題は、自然の暴威の前の人間の弱さを背景にした、人と人との力の争いであるのだろうか？ この結びつきからは、人間的存在の自然条件に苦し

と味方の遭遇であっても人と人との出会いであるという真実を語らずにはいないのだ。その結果、あたかも殺し合いの前に握手が、殺し合いの後に別れの言葉が交わされたかのような不安定な印象が伴う。兵士の言葉意識はこの不安定から「城塞」の安定へと向かうのであるが、不安定の実体は人を物体化し非倫理化しなくては耐えられない殺し合いというものの性質なのである。

## 5 魔女と戦争

シェイクスピアは作品の最初にその主題内容を暗示するコーラス役をする場を置く型の作家らしい。しかし、主題を直接にしゃべってしまう程芝居に確信の無い作家ではなく、黙劇で満足するほど物語りの見かけを信じてもいない。彼にとって作品の骨格をなす一連のストーリーは、一方で、珍しいアクションによって眼を奪う効果を狙いながら、他方で、何かのきっかけが触媒となって人物が硬い地殻だと信じていた彼の教養内部の社会通念と習性と規範意識が化学変化を起こすのをみせる実験装置なのである。整った言説の秩序に律せられているかに見える世界を、それに身を託するゆえに分裂を内包する個人へと分解して見せるのだ。終始同じパターンの出来事が繰り返され、連鎖し、互いに反映する。それで、気をつけて見ると我々はそのパターンに気がつき、自己批評する文化の悶えを悟ることができる<sup>8)</sup>。それを常に言葉の含みとして提示し、洞察を待っている作者が、勝手な台詞を入れる俳優を嫌ったのもうなずけるのである。そのようなコーラス的な導入部の例として、本章では、「マクベス」的一幕一場魔女のコーラスから、二場での二人の人物による戦況報告までの80行ばかりから幾つかの部分を適当に取り出して分析している。

外からはどう見えようと、またその見え方にどのような理由がありどのような権威があろうと、マクベスの心の経過に従う限り、彼には前のコーダーのように王権を王と争う意志は無かった。彼が結果的に前のコーダーの狙ったことを狙い、もっと陰険な方法でそれを試みることになったのは、「超自然」が彼を寵児のように呼び出して、王家の嫡子と同等の権利を無条件に与えたからである。マクベスは最後の最後までダンカンを殺すことを躊躇するが、「運命」が与えた権利を勇敢に行使せよという妻の論理にも非の打ちどころが無い。すでに述べたように、これが王権制度が必要とした「運命」の性質なのである。そしてまた、以上を総合すれば、「反逆者」になることなく「王」になるのであれば「超自然」が意味をなさないのも明かである<sup>9)</sup>。「魔女」は、ダンカン王やその嫡子が聖

た、布製の人形に対する刃物の圧倒的な物理的無機的な優越性に置き換えられる。このようにして生きる欲望に対する敵意の拒絶性が無機化され非倫理化され、“fix’d his head”によって「固定」され、“battlements”の硬度によって受けとめられ、“our”の利害感覚に吸収されて合法化される。

この描写法の表層的な隠蔽効果を指摘するのは難しくない。まず、戦士マクベスの肉体も相手の剣の前に晒されたあっけない弱さの物体であることが隠されている。また、話者の信頼の拠り所である「城塞」はそれ自身の力を持つのではなく、剣の前での身体のような晒し合いの結果に専ら依存することが隠されている。個々の勇士の働きを特筆する語り口は、一人の力では一人の命さえ守れないことを隠すのである。この隠蔽によって、激しい消耗の喘ぎと、消滅の危機が表面から消える。だが、誰にも気付かれること無くここから消えているのは、これが「威光」を掲げて対峙する「王国」観念の実態だという事実である。

敵の戦闘心を“villanies of nature”と呼び、味方のそれを“valour”と讃えるような文飾が殺し合いという前提あつての二次的な身ぶりであるに対して、拒絶された挨拶のイメージには敵と味方という戦争の尺度とは違う眼差しが含まれる。殺意を合法化する言語環境に対照的に置かれた挨拶のイメージは、兵士の意図とは反対に、出合いの儀礼の持つ意味を抹殺される姿で強調することになる。私は、登場人物の世界と私の世界との区別についてのやかましい言説に気付く前に、意味の場に臨んでいる<sup>7)</sup>。

手を差し伸べる行為も言葉の挨拶も、出合の前後に涯てなく広がる時空を背景にしている。“hands”の動きは“farewell”という配慮を欠いては無意味である。儀礼は一瞬であるが、儀礼を成り立たせるのは一瞬でしかない遭遇にこめられた頼りない人生への洞察と共感なのだ。この配慮に対立するのが「敵」を悪魔のように扱う言葉の約束である。

戦場で演じられる対立は、目先は「味方」と「敵」とのそれであるように見えるけれども、実は「味方」と「敵」を区別する規律と人間の共感能力との対立であり、それは見かけは前者の圧倒的優勢を示している。意味のこのレベルでは、“which”がマクベスか敵方の猛將かという問や、「握手」は出合の始めの挨拶か別れのそれかという問などは意味を失う。

身体を寒さから守る着物を作る鋏のイメージが身体を断ち割る剣の有効さを強調する文脈で使われるように、挨拶の内容的時間と物理的時間との衝突が敵意の強調に利用されている。比喩に同調しようとする我々の不意を突くのは、これら不協和なイメージがそれでも出現するという現象である。兵士の比喩は、敵



にし、生き埋めにされた部分によって王が苦しまなくてもいいように生きて死ぬことを臣下に要求し、それを意識させる者を斬って捨てるよう王に要求している。

ダンカンの亀裂は舞台裏の独白に過ぎず、システムの独裁の舞台では反逆に当たる。ダンカンを支配しているのは、王朝の自衛網を境に敵は敵、友人は友人という定義である。逃亡するだけで友人さえ敵となる制度なのだ。しかし、王と反逆者とが互いに相手を想いながら漏らす独り言においては、体制上は折り合えない同士が忘れ得ない友人なのである。これは友人として意識されない他者たちについての洞察をもたらす<sup>9)</sup>。

#### 4 出合いと別れ

兵士はマクベスが敵の戦士を切り殺す様子を次のように描く。

For brave Macbeth—well he deserves that name—  
Disdaining fortune, with his brandish'd steel,  
Which smoked with bloody execution,  
Like valour's minion carved out his passage  
Till he faced the slave ;  
Which nev'r shook hands, nor bade farewell to him,  
Till he unseam'd him from the nave to the chaps,  
And fix'd his head upon our battlements.

(1. 2. 20-23)

出合いの瞬間が死と生の分かれ目であるような遭遇において生き延びる役をもぎ取るのが勇士の武勲である。ここには通常の挨拶は有り得ない。有り得ない“shook hands”や“bade farewell”が現れるのは、二つ重ねて儀礼性を強調し、行為の選択の可能性と時間差の感覚さえも印象しながら、儀礼性と選択可能性と時間感覚とを一挙に否定する効果を狙ったことなのだ。この否定が“till”の含む時間を極限まで切り縮めて勇士の剣の素早さを強調することができるのは、挨拶のイメージが単に瞬間性の比喻ではないからである。剣の一閃は一つの生涯を拒絶し、二つの生涯の触れ合いを拒絶する。

殺害の素早さは、縫製品と鋏との無害な家庭的生産のイメージから抽象され

苦痛を訴えても遅すぎる世界では、死を気にするのは考え過ぎであり、殺人におびえるのはみっともないと、理性は非情に告げる。「名誉」の舞台に勇者として登場するからには、俳優の素性は隠し通すべきなのだ。武装の下の子供達と、その傷を、本来の主人公でありその声であると認めてはならないのである。だが、今を生きる存在において血を恐れない勇者のいでたちは仮面なのだ。これは人の適役は何かという問いに他ならない<sup>5)</sup>。

### 3 生き埋め

長年の友人コーダーの領主の裏切りを訝って、ダンカンはいくか呟く。

There's no art  
To find the mind's construction in the face :  
He was a gentleman on whom I built  
An absolute trust.

(1. 4. 11-14)

忠誠とはどんなことか、反逆とはどんなことか、ダンカンにだけでなく反逆者にとっても、省みるまでもなく明かであった。死刑に立ち会った王子は、コーダーが謝罪して従容と死に就いたと報告する。それは当然だ、そうあるべきだと王は思う。当然でないのは裏切りの狂気があの紳士に隠れていたことなのだと。しかし、反逆によって可能性を試して敗れた男のどこに隠し立てがあったのだろうか？ 運を試す舞台と、友人の交わりの世界との間に亀裂があっただけなのである。闘って敗れた者は敗れたことを境目に亀裂の両側に足を掛けた。王は勝者の作る秩序を守り、それを美化する比喻によって亀裂を覆った。

コーダーの心を読むすべが無くても、彼の行為への対処の仕方が決まっていた以上、その「心の仕組み」にこだわるのは無用なことだった。反逆者を無条件に死刑に処した時にそれは確かに定義されたのである。「絶対の信頼を置いた」というダンカンの過去形の言葉は、信頼したのは間違いだったという意味にしかない。彼を王と認める宮廷の存立を優先して、記憶の証言を否定するのだ。ダンカンを守っているのも、ダンカンが守っているのも、彼の王朝体制の規律の効力である。ダンカン自身の引き裂かれた「心の仕組み」もその前では問題にならない。王国の大義は、反逆者に寄せる王の個人的な関心を禁じ、生き埋め

情け深いと聞こえたダンカンにできる思いやりのすべてなのである。

*Duncan.* So well thy words become thee as thy wounds,  
They smack of honor both. Go get him surgeons.

(1. 2. 43-44)

明らかにここで「名誉」は命の可能性の比喩であるが、兵士が明日死んでも王に責任はないだろう。「名誉」が命を捧げるに値するという美しい虚偽を演じ続ける他は無いのだ。

死者が出ないように配慮することは戦いのルールにない。生き延びた者は、生き延びて守ったルールを「名誉」として誇るほかはない。だから、死者達の死も誇るべき状況の一部であり、反省は要求されない。だが、抑え込まれた不安がひそかに異議を申し立てる。死者たちが生き延びようと懸命に戦っていた姿を思い出す者は、その時に遡って、彼らは死ぬべくして死ぬと予言しなくてはならないからである。生き延びた自分も偶然生き延びる役に当たっていたに過ぎないのだと。では、戦うという努力が接触の現場で明らかにする何が何でも生き延びたいという熾烈な欲望はどこに位置するのか？ 逃亡をも選択をも禁じられた欲望は「運命」の意志に転嫁され、予見できないその意志への禁じられた関心となる。

If you can look into the seeds of time,  
And say which grain will grow, and which will not,  
Speak then to me, who neither beg nor fear  
Your favours nor your hate.

(1. 3. 58-61)

撞着と言い逃れ！ だが、彼岸の「時の種」という幻想は、種らしく繁る希望を禁じられさげすまれた欲望がおとなしく追放された舞台なのだ。王のためには死を恐れないと豪語する勇士にあって、「運命」は傷ついた希望の比喩であり、「勇気」は「運命」に閉ざされた希望への細い橋なのである。欲望と規律を仲介するのは腕一本の剣の技であるが、その技の不確かさを支えるのは幻想の国の時間なのである。

これが勇気の比喩の舞台の二重構造である。生きる方策が死を呼び込む世界、

Or memorize another Golgotha,  
I cannot tell.

(1. 2. 36-41)

さながら比喩の名人の独演であるこれが戦況の“report”でありえるのは、勝敗の行方を心配する聞き手達が比喩の武装の向こうに意味明瞭な事件を見ているからである。修羅場を言葉の戯れに変えようとする比喩の努力は、恐怖と苦痛を口にしないという共同の心得によって、聴き手それぞれの記憶する戦闘の光景に照合され、血と汗にまみれて必死に剣を振るう姿の危急や、倒れ死ぬ者達の血塗れの傷口へと還元される。その限りでは比喩は必要と規律を十分に媒介しているように見える。

しかし、“I cannot tell”は“meant”あるいは“memorize”という解釈行為（＝有意味化の努力）が、“reeking wounds”あるいは“Golgotha”の切実さを種にした装飾のための装飾であることを物語っている。それに、「ゴルゴタ」からキリストの受難をふと思い出す者は、傷口の似通いと救済からの遠さに、それを思い出すべき場ではないのだとさえ思うだろう。比喩は隠蔽する。勿論隠蔽の機能を隠蔽することによって。

というのも、その時兵士が助けを求めるので、隠されたものが露呈するからである。近づく死の苦痛の前に比喩の武装がけし飛んで、傷口が露出する。

*Sergeant.* But I am faint, my gashes cry for help.

(1. 2. 42)

兵士は倒れる自分と助けを乞う傷を別者として扱うのであるが、この話法への忠誠ゆえに、その話法の意図に反して、隠された傷がよるべない声を聞かせる。昏倒の間に禁じられた助けを呼ぶ傷口は、“reeking wounds”の叫びを媒介する。切り殺して進む勇士もまた酸鼻のただなかから生を得ようとする者の必死の形相を呈するのである。

口を開けたのは兵士の傷口だけではない。「名誉」と呼ばれる隠蔽の仕掛けが傷口を晒す。「名誉」が苦痛の深さの影であることが見えて来るのだ。公の規律と私の声との序列が逆転する。それこそ隠蔽されている真相である。

それでも、深手を負った兵に医者を呼んでやりながら、王子を虜囚から救ったという彼の語り口と傷口とをせめて王の誉め言葉という最高の名誉で覆うのが

The Prince of Cumberland ; which honour must  
Not unaccompanied invest him only,  
But signs of nobleness, like stars, shall shine  
On all deservers.

(1. 4. 33-42)

ようやくつながった希望の糸に継承を託す王朝にとって、取り囲む今の敵や未来の不安との苛烈な争いを戦い抜く他にどんな希望があっただろうか？ 命を張って手にした束の間の勝利の安堵だけが、自由な生への憧れの、唯一手にできる似姿であったのだ。

死の脅迫によって死の脅威に対抗すること、戦闘集団が生き延びるにはそれしかなかった。死地が希望の場であり、死を怖れることは裏切りであった。王を囲んでいるのは力の限りを尽くして生き延びた勇士達であったが、それぞれの将来を設計し提案することは禁じられていた。生き延びた「近しい人々」を見渡して勝利の喜びを語るダンカンの言葉からは、死者達の敗北と挫折が脱落し、先ほど彼が耐えていた敗戦と死と終末の覚悟も脱落している。勇士を「飾る」であろう「星のような」名誉が輝くのはそれに「値する」人が生きている限りであるということも、それが輝くのはその名誉に値するための条件を肉体の限界にまで履行しながら排除された死者達の冷たさとの暗黙の対比によるのだということも沈黙のなかだ<sup>4)</sup>。

生き延びたことの喜びが、忠誠の的である王に許された自由の範囲で、死の苦痛を無視する言葉の約束と衝突している。ダンカンの涙が奇妙に恥ずかしげに屈折するのは、生の喜びに正当な席が無いからだ。それは「恥」じらう。暫し涙に陪席が許されるのは、同胞の死の「悲しみ」の時だけ、涙が無効である時だけである。戦争という協同作業は個々人の自己愛を禁じるだけではなく、人と人との絆を無意味にする。

身体の訴えと表現のルールとの衝突は、一貫してこの世界の特徴をなしている。王の前に立つ兵士の言葉を聞こう。

If I say sooth, I must report they were  
As cannons overcharg'd with double cracks, so they  
Doubly redoubled strokes upon the foe.  
Except they meant to bathe in reeking wounds,

を信じているマクベスが、一つの行動の二つの解釈の間で己を失ったマクベスを何も知らずに倒したところなのだと。魔女の魅惑と詐術の痛切を暗い胸底に収めまま死者はもう動かない。

かたわら、マクベスの独白に触れたわれわれは、その恐怖と焦燥と絶望によって心の暗い淵をかき回される思いを味わった後、鎮魂を祈るかのように、彼は死んで自由になったと言うだろう。明日を知らず今日を生きるのに忙殺される者の鎮めのためのわびしい忘却の権利。

だから「自由」の条件はこうだ。勝利の祝賀の気分死者の暗い秘密を接触させないように、一つの思考回路を厳しく守ること。習性となった支配的な回路なのだから。「魔女」を幻想の戯れとして理性と秩序の舞台から追い出し、マクベスが登場した「帝王の主題」の舞台を一場の荒唐無稽な「白痴の物語り」とみなし、「屠殺者」マクベスを放逐するついでに「勇者」マクベスの記憶を消し、生きる方針を「王」と「篡奪者」という目前の序列に求め、「汝こそは王たる者」の叫びに唱和してあらゆる希望を転嫁すること<sup>2)</sup>。

今という時間には限りない新しさがあるということに特に気がつく瞬間がある。しかし、時は人がそれに気がつかなくてもいつも新しいのである。思想が形骸化したり企図が因習化したりするのもまた人の刻々の選択によるのである。果たしてわれわれの選択が苦痛に正確に対応できているかどうかだけが問題なのだ。苦痛の表情から見落としに気がつくかどうかだけが問題なのだ<sup>3)</sup>。

## 2 傷 口

戦が辛うじて勝ちに終わった時にダンカンが流した喜びの涙は、心ひそかに絶望の雷に打たれた者だけが知る、生きる見通しを得た感動の涙だった。死地に生を求めよう騷られた男達の世界では、それを曲がりなりにも流したのは老いた王だけだったけれども。

My plenteous joys,  
Wanton in fullness, seek to hide themselves  
In drops of sorrow. Sons, kinsmen, thanes,  
And you whose places are the nearest, know  
We will establish our estate upon  
Our eldest, Malcolm, whom we name hereafter

# “THE IMPOSITION CLEAR'D”

——シェイクスピアにおける時間と救済——  
(承前)

丸 田 敬

## 第 三 章

### 死 者 の 行 方

#### 1 転嫁：「自由」の条件

Hail, King ! for so thou art. Behold, where stands  
Th' usurper's cursed head : the time is free.

(*Macbeth*, 5. 8. 54-55)<sup>1)</sup>

「自由な時が来た」。「篡奪者」を切り殺した勇猛忠誠なマクダフに「王」と呼ばれて、やがて戴冠式を迎えるマルカムが宮廷再建の布石をしている。多少の残党狩りが残っているけれども、ダンカン王の嫡子の王権は確立したようである。功績のあった者達には新たな爵位も設けられた。だが、これはどこかで見たことがある。「マクベス」の終わりを飾るこの光景は、その始まりに余りにも似ているのだ。あの時マクベス達の血みどろの働きでようやく勝利を収めたダンカン王は、マルカムを後継者に立て、敵に内通した者を死刑に処し、勝利の最大の功労者マクベスに新たな名誉を与えたのだった。

似ているのは当然だろう。宮廷の存続と継承の儀式なのだ。マクベスが敵を倒した時の宮廷の姿が、裏切り者マクベスが倒された時のその姿と等しいのは当然ではないか？ しかしそれならば、同時に言わなくてはならない。「自由な時」は、忠誠な勇士マクベスが魔女に出会って見せたあの法外な傷つき易さをその内に抱えているのだと。世界の一つの姿とその中での自分の一つの行動方針と